

宗教言語論としてのサリー・マクフェイグの隠喩神学

澁谷遊歩

アメリカの神学者サリー・マクフェイグは、現代の宗教言語の問題として、偶像崇拜の問題と、不適切性の問題の二つを挙げている（1）。この二つの問題への抵抗として彼女が提案するのが、隠喩神学と呼ばれる神学である。

ここで提出されている問題は、言い換えれば、特定の言語表現が不当に絶対化されてしまったり（偶像崇拜）、あるいは逆にそれが個人に合わないものであったり（不適切性）という状況の中で、言語をいかに有意味なものに保てるかという問いである。

これはより広く、次のような問いとのつながりを見ることが可能である。すなわち、キリスト教に関わる言語行為には多用な機能や目的が考えられるが、それぞれの機能や目的に対し、言語の具象性（言語レベルでの具体的な意味内容など）がどの程度貢献するのか、そしてどのように貢献するのか、という問いである。なぜこのような問いにつながるのかといえば、偶像崇拜の問題は特定の意味内容が必要以上に強く取られてしまうという問題であり、不適切性の問題はあらゆる意味内容が切り捨てられてしまう問題として読み替え可能だからである。

本研究ノートでは、マクフェイグの提案する隠喩神学を、このような一般的な宗教言語論へと将来的に接続しうる潜在性をもつものとして捉えた上で、冒頭で述べた二つの問題（偶像崇拜と不適切性）にマクフェイグがどのように抵抗を試みているのかという問題を検討したい。

1. 隠喩神学の「であり、でない」性質

マクフェイグが挙げる二つの問題、すなわち偶像崇拜の問題と不適切性の問題にどのように抵抗を試みるのだろうか。この点について考えるには、マクフェイグ自身が「であり、でない」と呼ぶ性質、すなわち隠喩神学の否定的側面と肯定的側面の役割に注目する必要がある。マクフェイグはこの二側面を適切に働かせるため、メタファーやモデルという道

具立てを導入する。ただし、メタファーやモデルがどのように「であり、でない」という性質へと結びつくかについては、検討の余地が残る。

本節ではまず、隠喩神学の肯定的側面と否定的側面について確認する（1・1）。続いて、この肯定的側面と否定的側面が適切に働くために、マクフェイグが導入するメタファーやモデルという道具立てについて確認する（1・2）。その上で、「であり、でない」という性質が、個々のメタファーやモデルの言語的レベルの性質に還元できるかを検討する（1・3）。結論を先取りしていえば、隠喩神学の固有性を理解するにあたっては、そのような還元を行うだけでは不十分だということが示される。

1・1 隠喩神学の肯定的側面と否定的側面

マクフェイグは、メタファーとイエスの譬話（あるいは譬話として解釈されるイエス）は、共通する形式を持つと考えており、そのため隠喩神学は「隠喩神学はイエスの譬話と、神の譬話としてのイエスから始まる」と述べる（2）。なぜ両者が共通の形式を持つのかといえば、イエスが譬話を通じて人々に教えたのは世界における通常とは異なったあり方なのであり、そのような未知の事柄を人々に伝達するにあたっては、既知の事柄を媒介として未知の事柄を伝えるという手法、すなわち隠喩的な手法に頼らざるを得ないからである（3）。

マクフェイグは、隠喩神学の「であり、でない」という性質についても、イエスの譬話（あるいは譬話として解釈されるイエス）を起点として論じるという形を採る。

まず、隠喩神学の「でない」の側面である。マクフェイグの理解では、イエス自身の生と死もまた、神という未知なるものを人々に理解させるための譬話となる。彼女は神と人間との連続性や同一性を認めないようなキリスト論（彼女はそのようなキリスト論を、「受肉論的キリスト論」から区別して「譬話的キリスト論」と呼ぶ）を採用し、そのようなキリスト論こそが「プロテスタント的感受性と現代の心性のためのキリスト論である」と述べる（4）。この、神と人との間にいかなる連続性や同一性も認めないという考え方が、隠喩神学の方法論にも引き継がれるという点をマクフェイグは強調する（5）。すなわち、こうした点を引き継ぐ隠喩神学は、無制限性・試行性・間接性・緊張性・偶像破壊性などを特徴として持ち、あらゆる偶像崇拜を認めないこととなる（6）。したがってそ

ここでは、例えば神についてのいかなる言明も、神と同一視されることはあり得ず、その字義通りの解釈は拒絶される。以上が隠喩神学の否定的側面である。

続いて、隠喩神学の「である」の側面である。マクフェイグは前節で見たような隠喩神学の否定的側面を強調した直後に、「隠喩神学は、神についての語りの限界を指し示すだけでなく、資格を与えもするのである」と述べ、隠喩神学が神についての語りを全て否定するものではないことを主張する(7)。彼女は「私たちは神についていかに語るか」という問いと「私たちは神について何を言うか」という問いを区別し、前者の問いについては偶像崇拜の拒絶を以て応えるという姿勢を崩さない一方で、後者の問いについて「何も語ってはならない」と拒絶することはしない(8)。ではいかに語るのか、という問いに答えるにあたり、彼女は再びイエスの譬話(そして譬話としてのイエス)へと立ち返る(9)。イエスの譬話においては、人間の関係性が重要な要素である(10)。したがってその点を引き継ぐ隠喩神学は、イエスが譬話においてそうしたように、神を語るにあたって人格的な言葉や関係性を表す言葉を用いるという特徴を持つことになる。以上が隠喩神学の肯定的側面である。

前節の問いに戻ろう。メタファーやモデルは、マクフェイグが挙げる二つの問題、すなわち偶像崇拜の問題と不適切性の問題にどのように抵抗を試みるのだろうか。

いま確認した隠喩神学の二つの側面、すなわちイエスの譬話(あるいは譬話として解釈されるイエス)から引き継いだ否定的側面と肯定的側面は、それぞれが宗教言語の二つの問題への抵抗の契機となっている。隠喩神学の否定的側面は、神についての語りが不当に字義通りに取られることを回避するべく働くし、隠喩神学の肯定的側面は、その上で神についての語りが無意味化することを回避するべく働く。したがって偶像崇拜の問題と不適切性の問題の双方を避けるためには、隠喩神学における「であり、でない」という性質は重要な要素となる。

したがって、前節の問いはその半ばまで答えが与えられたことになる。隠喩神学は、その両面性、すなわちメタファーの「であり、でない」という性質を用いて、宗教言語の問題に抵抗を試みるのである。すると残る問題は、その「であり、でない」という性質はどのように発揮されるのか、ということである。そのためにマクフェイグが導入するのが、メタファーやモデルという道具立てである。

1・2 メタファーとモデル

マクフェイグにとってメタファーとは、考えたり話したりする方法を知らないものについて、ほかの、よく知っているもの「として」見ることである。彼女自身の言葉を使えば、『これ』について考えたり話したりする方法を知らないので、それについて何かしらを言うために『あれ』を使う」ことである（11）。

隠喩神学においては、メタファーだけでなくモデルという道具立ても重要な役割を果たす（12）。その必要性を説明するため、まずマクフェイグは「隠喩言語」（一次的な宗教言語）と「概念言語」（二次的な宗教言語）を区別する。「多くの一次言語は暗黙のうちに概念的であるし、多くの二次的な言語は潜在的に想像的であるから、その区別を明瞭に保つことは不可能」であり、両者は連続体をなす。そして、実際の宗教的な言語使用においては、隠喩言語と概念言語は混合して現れる。したがって、隠喩言語と概念言語の間に明確な線を引くことができない以上、隠喩神学は隠喩言語のみならず概念言語を射程に入れる必要がある、というのが彼女の主張である。

この隠喩言語と概念言語を両極とする連続体の中に現れるのが「モデル」である（13）。モデルは「持続力のあるメタファー」として定義される。通常メタファーが「束の間の直感の閃き」であるのに対し、モデルは「幅広い魅力を得て、経験を構造化したり秩序づけたりする主要な方法となる」ような特殊なメタファーである。あるメタファーがモデルとして理解される場面がどのようなものであるかを確認するため、彼女が挙げている「父なる神」という具体例を参照してみよう。

したがって、もし神が「父」のモデルに基づいて理解されるならば、人間は「子ら」として、罪は「父」への反抗として、購いは「父」に対する罪責について「年上の息子」が「兄弟姉妹たち」に代わって犠牲となることとして、等々と理解される。（14）

この例から読み取れるように、モデルとなったメタファーは、そのメタファーが想起させる諸イメージからなるひとつの連関構造の、いわば中心軸の役割を果たすこととなる。

それでは、こうして導入されたメタファーやモデルは、隠喩神学の「であり、でない」という性質にどのように結びつくのだろうか。

1・3 「であり、でない」性質は個々のメタファーのレベルに還元できるか

問いは次のような仕方でも問われることとなった。偶像崇拜の問題と不適切性の問題、この双方の回避は、隠喩神学の試みの中でどのように実現されるのだろうか。すなわち、隠喩神学の「であり、でない」という性質は、具体的には個々のモデルやメタファーとの関係においてどのような内実を持つのだろうか。

まず素朴に、「であり、でない」という性質を、メタファーの持つ、言語的なレベルでの否定性と肯定性の緊張へと還元するという道が考えられるだろう。例えば、「神は父である」というメタファーないしモデルが、「神は父であり、かつ、父でない」という緊張をはらんでいるのだとすれば、そのメタファーないしモデルは「神は父である」という事実を断言していることにはならず（偶像崇拜の回避）、かといって「神は父である」という言明が完全に無効化されることもない（不適切性の回避）。このように解釈する限り、確かに個々のメタファーの性質が偶像崇拜と不適切性を回避する役割を果たしているように見える。

マクフェイグがメタファーという言語現象をこのように捉え、そして個々のメタファーの持つ緊張を重視していたのは事実である。しかし、隠喩神学という試みの固有性を明らかにするためには、「であり、でない」性質を個々のメタファーのレベルに求めるだけでは不十分である。

確かに、「神は父である」という言明がある面では「神は父である」ことを表し、別の面では「神は父である」ことを表していない、といった議論は、神についての語りにもメタファーが使用されることを擁護し、それらが字義通りに正しくなくとも何らかの仕方でも意味ある言明なのだ、あるいは何らかの仕方でも現実を描写しているのだ、と主張する上では非常に有用である。しかしマクフェイグは、”*Metaphorical Theology*” や ”*Models of God*” 等の著書において、宗教言語におけるメタファー使用一般の擁護を目指しているのではない。彼女の論は、自身が提案する隠喩神学という実践の、その基礎をなす理論を語るという形で行われているのである。したがって、偶像崇拜や不適切性という問題を回避するために不可欠な、メタファーの「であり、でない」という性質の内実については、個々のメタファーのレベルだけでなく、実際の隠喩神学の試み全体、すなわち諸メタファーが繰り返し試される時間的な流れ全体を捉える視点から検討される必要がある。次節では、その検討を行う。

2. 隠喩神学の時間的プロセスにおける「であり、でない」性質

隠喩神学は、その「であり、でない」という性質によって、神についての字義通りの語り／神についての語りの全面的な諦め、という二項対立を避ける試みとして捉えることができる。しかし、「であり、でない」という性質を個々のメタファーやモデルに帰すだけでは隠喩神学の手法の固有性は明らかではないし、さらには「であり、でない」性質が具体的にどのような仕方で二つの問題を回避するのかという点も不明確なままである。

本節では、隠喩神学の目的達成のために使われているメタファーの「であり、でない」という性質は、個々のメタファーについてだけでなく、諸メタファーや諸モデルが繰り返し試されてゆく時間的プロセス全体から捉える必要があるということを確認する。そのためにまず、マクフェイグの隠喩神学を類似の試みから区別するような、隠喩神学に固有な特徴を二点取り出して確認したい。第一に、隠喩神学が持つ「発見的」と呼ばれる特徴について扱い（2・1）、第二に、隠喩神学には異質な二つの視点が組み込まれているということを確認する（2・2）。それらを踏まえ結論部では、諸メタファーや諸モデルが試される時間的プロセス全体の中に「であり、でない」性質を位置づけることを試みる（2・3）。

2・1 発見的性質

ひとつは、隠喩神学が持つ、「発見的」と呼ばれる特徴である。隠喩神学のこの特徴についてマクフェイグは、” *Models of God*” のはじめの章で触れている。

そこで彼女は、隠喩神学の特徴のひとつとして、「解釈的でもなく、構成的でもなく、発見的である」ことを挙げる（15）。ただし、隠喩神学は「解釈的」「構成的」な要素を全く持たないということではなく、むしろその両者それぞれと類似しているとされる（16）。

まず一方で隠喩神学は、聖書を含むユダヤ・キリスト教の古典的テキストや過去の模範的な神学テキストの解釈に関わるという点で、「解釈的」な特徴をもつ（17）。他方で隠喩神学は、哲学・文学・芸術のほか自然科学・社会科学の助けも借りながら神・世界・人間といった概念の明確化を企図する点、そして、現代にふさわしい神や世界についての理

解が概念的なものであり、その組み上げには宗教以外の要素も大いに寄与しているという見方を指示する点で、「構成的」な特徴をもつ（18）。

しかし、隠喩神学は単なる「解釈的神学」ではない。なぜなら隠喩神学の射程は古典テキストの解釈外にも開かれているからである（19）。そして、隠喩神学は単なる「構成的神学」でもない。ただし、隠喩神学と構成的神学とが異なる類型であるというよりも、隠喩神学は典型的な構成的神学に加え、いくつかの点を強調する特殊な構成的神学であると捉える方が、直後のマクフェイグの記述には近い。この部分について、マクフェイグはことさら丁寧に議論を進めている。逆に言えば、この部分こそが隠喩神学の戦略の鍵といえる。

マクフェイグは、隠喩神学と単なる構成的神学との差別化を図るにあたり、隠喩神学が特に強調している要素として、実験的であること、想像的であること、多元的であることの3点を挙げる（20）。この三者は互いに補い合いながら「発見的」神学の特徴を形づくるといえる。すなわち隠喩神学においては、モデルは繰り返し試され（実験性）、その結果複数のモデルが打ち立てられるが（多元性）、そのような試行の繰り返しやモデルの共存が可能となるのは、想像力のもつ豊穡性ゆえなのである（想像性）。マクフェイグがこれらの特徴を強調することを踏まえれば、典型的な構成的神学と隠喩神学との区別は明確になる。彼女が想定する典型的な構成的神学は、概念の明晰性にこだわるあまり、しばしば想像力のもつ豊穡性を犠牲にしてしまい、その結果として多元的なモデルをうまく並存させることができない。隠喩神学は、その問題を克服することも目指されているのである。

さてそれでは、隠喩神学の中で、「構成的」側面と「解釈的」側面はどのように関連しあい、協働することになるのだろうか。以下で引用する一文は、この点について具体的に述べられた一例として読むことができるだろう。この箇所は、有益なモデルとしての潜在性を秘めているとされる「母」「解放者」というメタファーについて述べられている部分である。

「それら〔「母」「解放者」というメタファーないしモデル（引用者による補足）〕は人間の関係的な実存から生じ、新約聖書の譬話的な次元によって、文字通りではなく（文言は現れない）、私たちが「母」や「解放者」と関連づける諸特徴が

(…) 神の驚くべき支配に適合する (そしてもちろん、それと同時に適合しない) という意味において、資格を与えられる」(21)

実際に具体的なモデルやメタファーを提唱する立場から見ると、引用箇所想定されている作業は次のようなものであろう。まず、人間の実存のうちから、関係性を表すようなメタファー、及びそれに対応するモデルが選び取られる。次に、このモデルが部分的に聖書の記述と一致することが確認される。

したがって、実際にマクフェイグが行うであろう行程においては、あるメタファーやモデルが実存から生じ、それが提唱され、人々の認識や行動に影響を与えるという「構成的」過程と、聖書の記述がモデルの断片として解釈される「解釈的」過程が並行して進むこととなる。

ここで注目したいのは、いずれの過程においても、不確実性が想定されていることである。実存から選び取られる関係は一通りではないため(「父」「母」「友」、等々)、どのようなモデルが選び取られるかについては複数の可能性がある。もちろん神学者としてのマクフェイグの意図は、現代の状況に合わせたモデルを推奨することにあるのだが、現代の状況がモデルをひとつに決定するわけではない(構成的過程の不確実性)。そしてまた、古典的テキストの記述はモデルの断片として解釈されることで、いわば事後的にお墨付きを与えはするものの、古典的テキストの記述が自動的にモデルを決定するわけではない(解釈的過程の不確実性)。この二重の不確実性が、隠喩神学の発見的性質を支えている。

そして、これらの不確実性によって隠喩神学は、二つの問題(偶像崇拜と不適切性)を回避するのである。モデルの選定は必然ではなく、そこには常に失敗のリスクがある—「危険を冒す神学」(22)—ため、提唱されモデルを実体的に捉えるべきではないという帰結が生じる。さらに、新たなモデルが繰り返し提唱されることになるため、特定のひとつのモデルが支配的になることも避けられ(偶像崇拜の回避)、現代を生きる様々な立場の人にとって適切で関連のあるようなモデルが提唱されることも期待される(不適切性の回避)。

改めて本節冒頭の議論に戻ろう。マクフェイグの隠喩神学は、〈神についての字義通りの語りか、神についてのあらゆる語りの諦めか〉という二項対立に、メタファーやモデルを用いて抵抗する試みとして捉えることができるが、その抵抗が具体的にどのようなものなのかこそが隠喩神学の固有性に関わるはずであった。すでに確認してきた内容を踏まえ

れば、その抵抗とは次のようなものとして描けるはずである。隠喩神学においては、モデルの決定の裏に常に張りついている失敗のリスクのため、神についての字義通りの語りは回避される。そして、モデルはそのつど「実験」され、そのつど具体的な影響を人々に与えるので、個々のモデルが極端に無意味化することもない。むしろ、隠喩神学は神についての語りを積極的に更新してゆく立場となる。

2・2 二つの視点

続いて、隠喩神学のもうひとつの特徴へと移ろう。その特徴とは、ある異質な二つの視点が、不可欠な要素として議論に組み込まれているということである。そのことを確認するためにまず、マクフェイグの議論には、言語やモデルが世界を構成するという事実について、(1) その事実を理解している視点と、(2) その事実を忘却している視点、双方が現れるということを確認する。

2・2・1 構成の自覚

まず、マクフェイグの議論においては、人間は言語やモデルによって自らの住んでいる世界を構成しており、したがって神学もまた構成的であるという前提が不可欠である。マクフェイグは、そのことを自覚すべきだという促しを、幾度も明確に行っているが、そのひとつは例えば次のような箇所である。

もし、現在人間が所有している未曾有の核の知識によって引き起こされる問題の解決に、神学者や宗教を学ぶ学生たちが参与すべきであるならば、彼らはキリスト教信仰の伝統的諸象徴を解体し再建するという召命に答えなければならない、と私は信じている。この勤めは、キリスト教神学は単なる解釈学であってはならないし、あるいは、もっぱら解釈学に終始するだけであってはならない、ということを示唆する。すなわち、伝統の解釈や、古代の諸信条や諸概念を現代の文化に関連づけるような翻訳をするだけであってはならない。そうではなく神学は、過去と異なる仕方で考えることを厭わず、自覚的に構成的 (self-consciously constructive) でなければならない。(23)

この直後に彼女が述べているように、この自覚は「より適切なメタファーやモデルを実験することができる」ところまで高められる必要がある。そして、このメタファーやモデルの「実験」が、隠喩神学の務めでもある。

彼女が「構成的神学」という言葉で指すのは、神や世界についての私たちの概念に関する諸可能性を扱うが、神や救済の力そのものには言及しないという『『自由な神学』(“free theology”)』のことであり、隠喩神学もこの特徴を継承する。すなわち、神の救済は重要な問題であるが、神学者はその状況に全く寄与することはない(24)。それでは神学者は無力だということが帰結するのかもしれないと言えそうではなく、彼女はそこに積極的な意味を見出す。

あるいはそれを積極的に言うならば、神学は状況に差し向けられたたった1つの方法、冒険と新しさを要求する方法である。神学者はぶどう園にいる多くの働き手の中に位置する。彼らの仕事は、神と世界の間関係を表現するために用いられる言語に対する特別の責任を伴った、固有の、そして私はそう信じているのだが、限られた仕事である。(24)

先の議論(2・1)も踏まえて彼女の言葉を補足するならば、実験的方法は「冒険と新しさ」を要求するが故に失敗リスクを持ち、そのことは、神学者の振る舞いひとつで事態が変化しうることを意味する。より具体的に言えば、各々の時点でどのようなメタファーやモデルを採用するか、という重要な判断が神学者に委ねられることになるのである。

彼女の見立てでは、神学者は私たちのもつ概念にだけ関わる。そして概念のあり方はいかようにも変化する。それゆえ、神学者は責任を求められ、ここに隠喩神学の務めが発生する。もしも、概念によって世界が構成されているという自覚がなければ、隠喩神学の務めも自覚されず、また鍵となる実験的性格も発生しない。隠喩神学においては、構成の自覚は欠かせない要件となるのである。

2・2・2 構成の忘却

マクフェイグは、現代のキリスト教神学に必要な「新しい感受性」として（１）生態論的な意識、（２）地球に対する責任の自覚、（３）言語が世界を構成するという見方への理解、の三点を挙げているが（２６）、この三点目を論じる箇所において、ニーチェを導きとしながら、人間が自ら住んでいる世界を構成しているということ、そしてその世界が固定されることによって人はしばしばその事実を忘れてしまうということを指摘する（２７）。この箇所は、先に述べたような世界の構成についての自覚を促す場面としてももちろん読めるのだが、ここでは後半部の、その構成の事実を忘れてしまうという要素について考えたい。ここで注目したいのは、この忘却の可能性そのものが、隠喩神学の議論全体の前提になっているということである。

そもそも、言語やモデルによって構成されたものが「自分の住む世界」（２８）と呼べるものであるためには、それが言語やモデルによって構成されたものであるという当の事実が、当人にとって何らかの意味で忘却されている必要がある。もしそのような言語の働きが常に完全に見破られているのならば、私たちは決してそれに拘束されることはなく、「私たちは自分の住む世界を構成する」（２９）と描写されるような状況はそもそも生まれえない。したがってマクフェイグの議論を成立させるためには、私たちは例の事実、すなわち世界が構成されたものであるという事実を、何らかの仕方で忘却することがある、という前提が必要なのである。

このことは隠喩神学にとって消極的な意味しか持たないのではない。すでに見たように隠喩神学は、不当に固定された伝統的諸象徴を更新し、人々の信念や振る舞いに影響を及ぼすことを務めのひとつとしているが、その試みを有効なものとするためにもやはり、言語やモデルが人々を拘束するという前提が必要なのである。そのためには、世界が構成されているということの忘却の可能性は欠かせないものとなる。

この忘却は具体的には、ある特定のメタファーがメタファーであるという事実が忘却され、人々を過度に拘束するという事態として現れると考えられる。というのも、マクフェイグにとって、概念とは「非類似の海の中から類似なものを引き出すこと」（３０）であり、概念による世界構成と、非類似の中に類似を見出すレトリックとしてのメタファーとは、連続的に捉えられているからである。

以上、隠喩神学において（１）構成の自覚（２）構成の忘却可能性の双方が不可欠な要素として前提されていることが確認された。まとめて述べるならば、事態は次のようにな

っている。構成が自覚されなければ、新しいモデルを試す動機づけがないが、試行の過程でなんらかの意味において構成が忘却されなければ、新しいモデルは試されたことにならない。また構成が自覚されなければ、失敗のリスクを有効利用することができないが、なんらかの意味で構成が忘却されなければ、新しいモデルが実用的な効果を生むことはない。

先に、世界構成の忘却と、メタファーがメタファーであることの忘却とが重なることについて触れた。それを踏まえると、世界の構成性についての相反する二つの視点を用いて、宗教言語の二つの問題を位置づけ直すことが可能となる。例えば、「神は父である」というメタファーは、それがモデルとなり広く浸透すると、メタファーであることが忘却されてしまう。これは宗教言語の偶像崇拜の問題に他ならない。一方で、「神は父である」というメタファーは、それが単なるレトリックにすぎないという点が極度に強調されると、個々人にとって無意味な言明となり、その役割をまっとうできなくなる。これは宗教言語の不適切性の問題に他ならない。

それゆえ宗教言語の二つの問題双方に対する抵抗はいかにして可能かという問いは、世界の構成性の自覚と忘却という二つの視点のバランスの問題としても捉え直すことができるのである。

2・3 「であり、でない」性質の位置づけ

隠喩神学の固有性は、つねに失敗リスクを織り込みながら時間的プロセスの中で繰り返されるといふ発見的な性格や、異質な二つの視点が省き難い形で組み込まれているという点にこそある。隠喩神学のこの二つの固有な特徴を踏まえれば、「であり、でない」という性質は次のような仕方で位置づけられるだろう。

隠喩神学において、諸メタファーや諸モデルは、繰り返し実験的に試される。そのつど試される諸メタファーや諸モデルは、つねに失敗のリスクがあるという意味で否定的（「でない」）であるが、具体的に試され効果を発揮する際にはそのつど肯定的（「である」）である。またその諸メタファーや諸モデルは、それがレトリックにすぎないと自覚している視点に立つときには否定的側面（「でない」）が際立ち、その事実を忘却している視点に立つときには肯定的側面（「である」）が際立つ。

結

隠喩神学は、偶像崇拜の問題と不適切性の問題という二つの問題を、現代の解決すべき問題として意識している。隠喩神学は、自身の「であり、でない」という性質によってその二つの問題への抵抗を試みる。その際に導入されるのが、メタファーとモデルという道具立てであった。メタファーは何かを何かと見なすことで、私たちが語り方を知らないものについて語ることを可能にする。メタファーが持久力を持ち、経験を構造化することができるようになったものがモデルと呼ばれる。

隠喩神学の「であり、でない」という性質は、まず第一にはこれらの個々のメタファーやモデルのもつ言語的な性質として解釈することができる。メタファーやモデルは「であり、でない」性質と呼べるような肯定と否定の緊張をはらんでおり、神と世界の関係について、一方では語ることの資格を持ちながら、他方ではつねに字義通りの解釈を拒むものである。これにより、偶像崇拜と不適切性という二つの問題に対して抵抗が可能となる、というわけである。

しかし、隠喩神学においてメタファーの肯定と否定の緊張が実際にどのように現れ、作用するのかを見ると、個々のメタファーのレベルでの分析だけでは不十分であることがわかる。そこでは、個々のメタファーやモデルのもつ二重性といったレベルではない、もうひとつ別のレベルでの「であり、でない」性質、すなわち、諸メタファーや諸モデルが繰り返し試される時間的プロセスの中で初めて捉えられるような「であり、でない」性質こそが、重要な役割を果たしている。

実験的に遂行されるこの行程の途上には、何らかの成功を収めるメタファーもあれば、そうでないメタファーもある。個々のメタファーのレベルで一律に静的な「であり、でない」の性質を考えるだけでは、隠喩神学全体の「であり、でない」という性質を捉えることは難しい。その性質は、二つの視点を切り替えながら、複数のメタファーやモデルが順々に繰り返し試される時間的プロセスの中で、初めて見えてくるのである。

注

(1) Sallie McFague, *Metaphorical Theology. Models of God in Religious Language*, Fortress, 1982, pp.5-9.

(2) *ibid.*, p.18.

(3) *ibid.*

- (4) *ibid.*
- (5) *ibid.*, p. 19.
- (6) *ibid.*
- (7) *ibid.*
- (8) *ibid.*
- (9) *ibid.*
- (10) *ibid.*, p. 20.
- (11) *ibid.*, p. 15.
- (12) 以下の議論は、*ibid.*, p. 22.
- (13) 以下の議論は、*ibid.*, pp. 22-23.
- (14) *ibid.*, p. 23.
- (15) Sallie McFague, *Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age*, Fortress, 1987, p.36.
- (16) *ibid.*
- (17) *ibid.*
- (18) *ibid.*, p. 37.
- (19) *ibid.*
- (20) *ibid.*, pp. 37-39.
- (21) Sallie McFague, *Metaphorical Theology. Models of God in Religious Language*, Fortress, 1982, pp. 21-22.
- (22) Sallie McFague, *Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age*, Fortress, 1987, p. 34.
- (23) *ibid.*, p. 21.
- (24) *ibid.*, p. 37.
- (25) *ibid.*, p. 38.
- (26) *ibid.*, pp. 3-6.
- (27) *ibid.*, pp. 5-6.
- (28) *ibid.*, p. 6.
- (29) *ibid.*

(3 0) Sallie McFague, *Metaphorical Theology. Models of God in Religious Language*, Fortress, 1982, p.16.